

O17-097

社会資源が限られる過疎地域での ネットワーク作りを期待した「ダウ ン症のある児の子育て教室」の開催 と工夫

北野 奈美、後藤 善則、新谷アサ子、
本間 雅代

石川県能登北部保健福祉センター

【目的】能登北部保健福祉センター管内は少子高齢化が進み、能登半島の先端という地域事情から療育機関や家族会等が少なく、市町職員は数少ない対象者に提供できる資源がないとの悩みを抱えていた。そこで令和元年から管内に点在しているダウン症のある児と家族を対象とした子育て教室を市町職員と連携し開催してきたが、令和6年能登半島地震により生活環境の変化や療育機関へのアクセスが困難となる等、課題も複雑になってきたことから今後の支援の在り方について検討した。【活動内容】教室は年1～2回のペースで8回開催した。参加者数は延べで児16名(実人数5名)、家族28名、市町職員31名であった。1回2時間で令和5年度からは家族の希望で休日に開催している。会場は管内市街地から等距離となる県所有施設を利用していたが、震災後は参加者が住む市町所有施設に変更した。内容は管内外のダウン症のある児の家族による子育て経験談や、特性に応じた子育てや健康管理、発達に合わせた運動や遊びをテーマとした講話、赤ちゃん体操や親子で出来るヨガ等の実技、親子で楽しめる工作も取り入れた。毎回、参加者から感想や要望を聞き教室運営に活かしているが、令和5年度からは参加率を上げるため、教室の様子の写真入りチラシを作成し案内している。また、市町職員には様々な年齢の児の成長を学ぶ場、支援者とのつながりを強化するため、教室運営に協力してもらっている。【結果】参加者の反応として、家族には他の家族の経験や、育児の様々な情報を交換することで先の見通しが持て、知識と安心を得る機会となった。また、保護者の連絡先を共有したことで自由に連絡を取り合うようになった。児には異なる年齢の児との交流が普段と違う学びの場となった。市町職員は、家族の思いやダウン症のある児の特性への理解や、家族との関係性を深めることができた。【今後の方向性】震災で生活場所が地元から離れた地域になったこと、仮設生活になったこと等でストレスが重なっている家族もいる。家族にとっては生活再建が最優先で、児の療育環境に潤いを与えることが難しい状況であるため教室の回数を増やし、各々が抱えている悩みの吐き出しと、ネットワークの再構築、参加しやすい居場所づくりに努めていく。特に被災したことによる新たな困りごとを拾い上げ、災害に備えた体制づくりができるよう関係機関との連携にも展開させていく。

O17-098

食物アレルギーをもつ幼児の保護 者が食物経口負荷試験を通して抱 く思い

三川 美幸

富山赤十字病院 7階西病棟

【緒言】

A病院では食物経口負荷試験を半日入院で行っており、保護者の思いを聞く時間が十分にとれていない現状がある。また、先行研究では、食物経口負荷試験に対する保護者の思いに焦点を当てたものは少ない。食物経口負荷試験を受ける保護者の思いを知り、支援の一助とするため本研究に取り組んだ。

【目的】

食物アレルギーをもつ幼児の保護者が食物経口負荷試験を通して抱く思いを明らかにする。

【方法】

A病院で食物経口負荷試験を実施した幼児の保護者のうち、研究協力の同意を得られた5名を対象とした。対面あるいはZoomで独自のインタビューガイドを用いて20分程度の半構造的面接を行い、得られたデータを質的記述的に分析した。本研究は、A病院の看護部看護倫理審査委員会の承認を得た(承認番号:24-5番)。

【結果】

食物アレルギーをもつ幼児の保護者が食物経口負荷試験を通して抱く思いを構成する要素として、8のカテゴリー、21のサブカテゴリー、45のコードが抽出された。カテゴリーは【原因食物を食べられるようになってほしい】、【病院だと安心して食べさせられる】、【症状出現への恐怖・緊張感】、【頑張る子どもを偉いと思う】、【意気込んで試験を受けることが辛い】、【アレルギーに配慮した食生活に伴う苦労】、【周囲の人と一緒に同じ物を食べられない子どもをかわいそうに思う】、【自宅での食生活が楽になる】があった。

【考察】

保護者は、医療体制が整った環境で安全に食物経口負荷試験を行うことを望んでいた。また、試験中は症状出現への恐怖や、慣れない環境で頑張る子どもを認める気持ちがあった。さらに、食物経口負荷試験で摂取可能な量が増えても、原因食物を摂取させていかなければならず、生活上の苦労や集団生活での苦労を感じていた。医療従事者は保護者の苦労を傾聴し頑張りを労うとともに、親子がアレルギーに配慮した食生活を前向きな気持ちで継続できるように支援することが求められていると考える。そして、食物経口負荷試験を繰り返し受けることで摂取可能な量が増え、食生活が楽になるという思いに繋がると考える。

【結論】

本研究を通して食物アレルギーをもつ幼児の保護者は、試験への前向きな気持ちがある一方で、試験中の症状出現への恐怖感や試験以外での生活上の苦労があることが明らかになった。